Meeting of fate

Dunkelheit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｅｔｉｎｇ　ｏｆ　ｆａｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ２１７２Ｈ

【作者名】
Ｄｕｎｋｅｌｈｅｉｔ

【あらすじ】
ある夜、光は時計台で１人の少女と出会う。そして段々と日常が変わっていく・・・

1話　始まり

「わー、息が白い」
吐息が小さな雲になって、灰色に染まった空になる。
ドアを開けて外に出た所で冷たい空気が頬を切り裂く。
「昨日までは暖かかったのに」
おもむろに床に座る。
ここは町を見渡せるのでお気に入りの場所だ。
この場所は、
この時計台から見える景色は自分だけのものだ。

しばらく、街を眺めているとメールが来た。
ＰｉＰｉＰｉ着信音と一緒にケータイが震えだし、鮮やかな色を発する。
「き、来たっ？」
あわててケータイを見てみると【おめでとうございます！あなたが当選しました！】
「なんだ・・・迷惑メールか」
はぁーと吐く息が白くなり空へのぼっていく。
受信ＢＯＸの中身をスクロールしていく。しかし、あるのは迷惑メールチェーンメールだけで友達や親などからのメールは一切ない。
もう高校に入学して７ヶ月も経つのに友達が全くできない。
最初は皆話しかけてくれたのだがすぐに皆自分から離れてしまった。
前に唯一１人友達ができたが、もう話してくれない、メールも自分から送っても返事が来ない、しまいには着信拒否されてしまった。やっぱり、あの子も自分から離れてしまった。もう自分には友達などできないのだ。

でもいつかまた仲よくしてくれるようになると思っている自分がいる。
期待などして期待しても無駄だと自分に言い聞かせているが、多少期待している自分がいる。そんな自分がもどかしくて嫌だ。
「はぁ～友達・・・欲しいなぁ」

しまった、やっちまった。
今更後悔したところでもう遅い。
絶対食い切れね・・・
でも光は食べる手を休めない。半分は食わないと俺の財布の中の諭吉がすべて旅立つ。何としてでもそれだけは回避しなければ。
何としてもこの【チャーハンの塔】を食い切らなければ諭吉が・・・
・俺の諭吉が・・・
「ほらほらどうした光？こんなの余裕じゃなかったの？」
俺の隣で明るい茶色のショートカットの女が笑いながら俺の頬をつつく。

『岡崎　真弓』ことの発端はこの女のせいだ。
【1時間で地獄チャーハンを食べきったら賞金5万円！　ただし残

したら3万、残した量が半分以下なら2万いただきます】この張り紙を見た真弓が無理やり俺参加させたのだ。
「光ならこんなの余裕で食べきれるよね？」
無理だとわかりきっててもわざわざこんなことを言ってきた真弓に腹が立った俺は、「当ったり前だろこんなの余裕で食ってやるぜ」

まさか本当にチャレンジさせるとは・・・。
まぁ余裕とほざいた俺も悪いんだろうがそれを真に受ける真弓もどうかと思う。
そんなことを考えていると残り時間が１０分を切った合図の鐘が鳴った。
「ほらほら光、せめて半分は食べないと3万円なくなっちゃうぞw」
ニコニコしながら言ってくるこいつにマジで殺意が湧いた。
いつか潰す。そう心に誓いながら光は塔の壁を崩し始めた。

地獄。そうとしか言いようが無かった。
結局、光は終了ぎりぎりで半分チャーハンを食べきったのだ。
そして今は公園のベンチで休んでいる。
「まぁこれもいい教訓になったでしょ、これからはあんまり無謀なことしちゃ駄目だよ」
差し出してきたスポーツドリンクを受け取り毒付く。
「誰のせいだと思ってんだよ・・・、全部真弓！お前のせいだぞ」
「えぇ～あたし悪くないよ、悪いのは安っい挑発に乗った光でしょ？」
「だからって勝手にチャレンジさせるってのは、おかしいだろ！」

「あぁ～男のくせにいつまでネチネチしてんのよ！もう知らない、あたし先に帰るから」
そう言うと真弓はそそくさと帰ってしまった。
それを呆然と見つめる光。
「あいつ・・・マジで帰りやがった・・・」
はぁ～とため息を吐きスポーツドリンクを一気に飲み干す。
溜息が空に同化していく。いつもなら気にも留めない様なことだが今日は何故か眼で追ってしまった。溜息が空に同化していくのを見ると。遠くに大きな建物があった。もう長いことこの町に住んでいるのにあんな建物見たことが無い。光はそれが気になったがここからは結構距離があるため、行くのは今度にして帰ることにした。

光は1年ほど前から1人で暮らしている。
父は昔から仕事一筋といった人であまり家庭のことに興味がなかった。
そんな生活が長く続いたためか光が中学の時に家を出て行った。
そして高校に入ったのを機に光も1人で暮らすことにしたのだ。
父が会社のお偉いさんでかなり金持ちのため町のはずれあたりではあるが1軒やに住んでいる。
そんな光だけの城が近付いてきたところで、光の前に1人の青年が現われた。
ホントに突然、現われたので、一瞬かなり焦った。
なんとなく独特の雰囲気を放っている青年だ。顔立ちはかなり整っていて俗に言う美少年というものらしい。
早く家に帰りたいので青年を横切ったところで声をかけられた。
「今日、ここから逆方向の町はずれに大きな建物があったでしょ？あれは時計台です。
あの時計台が十二回目の金を鳴らすとき、あの場所に行ってみな

さい。きっとあなたにとってとても大切な出会いがあるでしょう」
とっさに後ろを振り返るが誰もいなかった。少しあたりを探してみたがさっきの青年らしき人物はどこにもいなかった。
「俺少し疲れてんのかな？まぁ良いやさっさと帰ってやすも」

今夜、光は時計台で１人の少女に出会う。
それが光の人生を著しく動かすことになるとは光は知るよしもなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2172h/

Meeting of fate

2011年1月7日14時35分発行